

# コットンの可能性に期待



基調講演で綿花の可能性について話す近藤さん

## 高山で全国サミット開催

全国の綿花栽培者や綿製品関連事業者らが情報交換などをする「全国コットンサミット」が9月25日、高山村保健福祉総合センターで開かれた。村は昨年度から遊休農地の解消などを目的に、村農業委員会、信州大繊維学部、須坂園芸高・須坂創成高と連携して綿花の試験栽培に取り組んでいる。コットンサミットは県内初開催で、基調講演やパネル討論などを通じ、村内外の約400人が綿花に対する理解を深め、今後の産業としての可能性を考えた。

基調講演は「世界に通じるエシカルファッション〜エンジンニアとデザイナーによる未来

のライフスタイルの展望」をテーマに、全国コットンサミット実行委員会会長で大正紡績(大阪府)素材戦略

シニアディレクターの近藤健一さんと、イッセイミヤケ(東京都)取締役企画技術ディレクターの皆川魔鬼子さんが話した。

さんは「天然繊維は憧れてなければいけない。憧れがあることでもっと重要なものになる」と話した。

高沢さんは、純国産のものづくりを「世界

近藤さんは、天然繊維と化学繊維の需要割合や、化石燃料の可採年数を示しながら、「コットンは未来型」と述べ、綿花が持つ可能性を説明した。

繊維の需要は化学繊維が全体の70%近くを占め、ポリエステルやナイロン、アクリルなどの合成繊維が主。一方、天然繊維は30%ほどだが、そのほとんどを綿が占めており、羊毛や絹、麻はわずかと

いう。将来、合成繊維の原料となる石炭などの化石燃料が減り、現在のように入採掘できなくなれば(価格が)逆転して化学繊維が高くなっていく。そうなると綿花を復活しなければならぬ」と述べた。ただ、原料だけでは儲からないとし、「テキスタイル(織物、布地)にすることで付加

で最も価値のあるものづくりになり得る。これから進めていくべき」と語った。

久保田村長は「綿花は果てしなく希望の持てるもの」と期待を膨

価値を上げる。これが未来型」と強調。そのためは、綿花だけでなく、絹や羊毛などを混合させた製品づくりの必要性を提言した。天然素材を使ったテキスタイルデザイナーをしている皆川さんは、自身が手掛けた製品を例に綿の使い方を紹介。「コットンは非常に使いやすい素材」などと魅力を伝えた。

◇◇  
パネル討論は近藤さんをコーディネーターに、皆川さん、信州大繊維学部長の下坂誠さん、高澤織物(長野市)テキスタイルデザイナーの高沢史納さん、久保田勝土村長がパネリストとなり、意見を交わした。

天然繊維の素晴らしさについて、下坂さんは「本能的にその良さを感じることができているのではないか」。皆川

らませた。

このほか高山中3年生は綿花学習について発表。子ども向けの綿繰り・手芸体験、綿製品などの販売ブース出店や展示もあった。